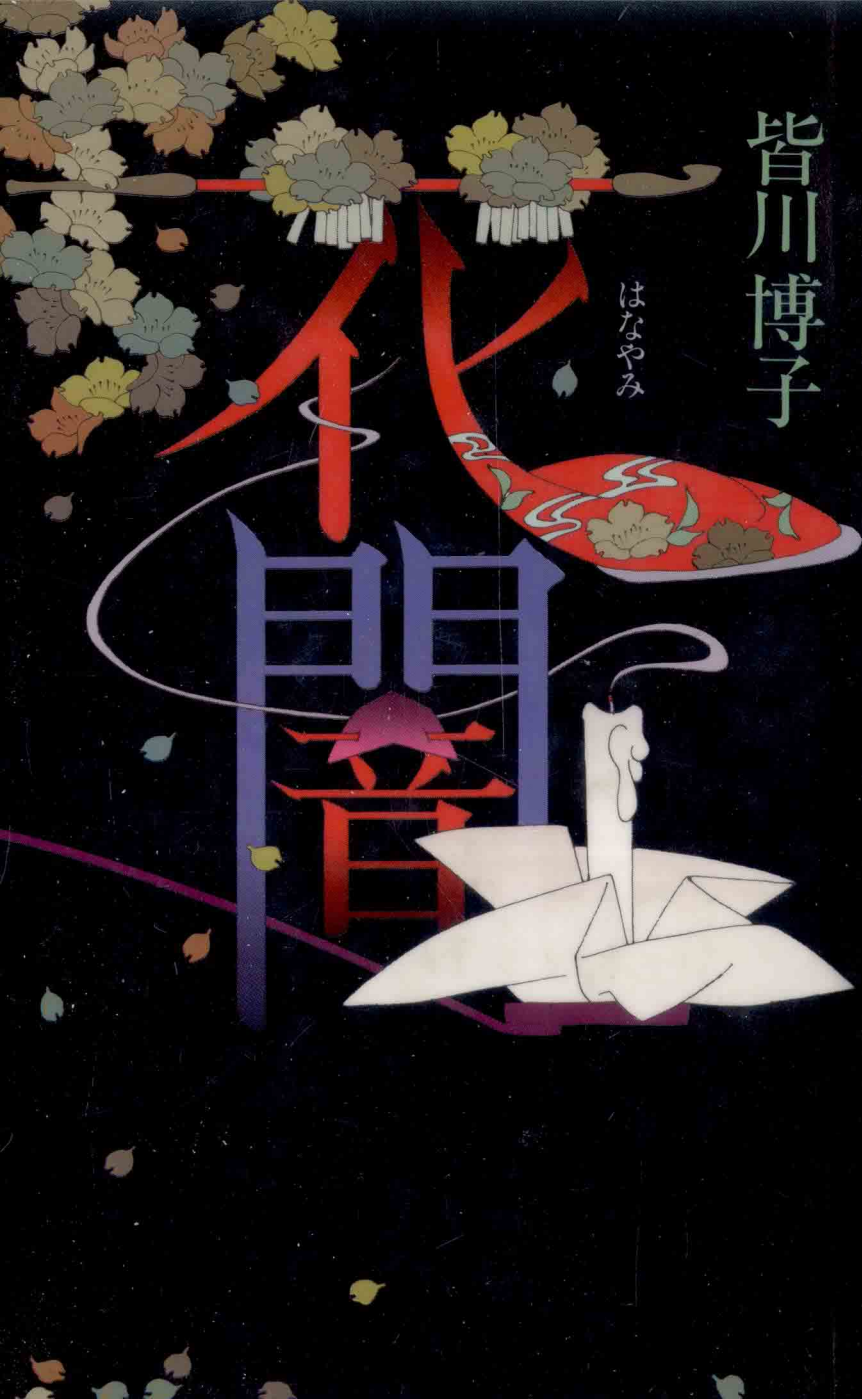
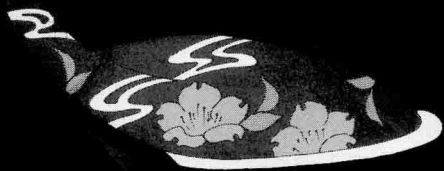
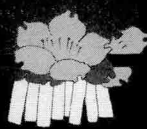


皆川博子

はなやみ





晉

花はな
闇やみ

定価一三五〇円

昭和六十二年八月十五日印刷
昭和六十二年八月二十五日発行

著者 皆川 博子

発行者 嶋 中 鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七

振替東京二一三四

◎一九八七 検印廃止

ISBN4-12-001602-1

花^{はな}

闇^{やみ}

三代目

澤村田之助

澤村由次郎↓澤村田之助（紀伊国屋）

五代目

尾上菊五郎

尾上九郎右衛門↓市村羽左衛門（橋屋）↓市村家橘
（橋屋）↓尾上菊五郎（音羽屋）

九代目

市川団十郎

河原崎長十郎↓河原崎權十郎（山崎屋）↓河原崎權之
助（山崎屋）↓市川団十郎（成田屋）

序 章

澤村田之助丈ね。

降る雪をかぶって重く垂れた幟のぼりの文字は、たしかに、そう読みとれた。臉に平手打ちをくったように、彼は立ちすくんだ。

見まわしたが、芝居小屋らしいものはない。雪一色の空地の一隅が高さ三尺ほどの台地となり、丸太を両端に数本立て、幟はその一つに縛りつけてある。幟の裾せた朱が、彼の目にうつる唯一の色彩であった。

すぐ傍に納屋らしいものが一つあるが、これは戯場しばいとは思われない。

このような片田舎にあるはずもない田之助の幟……。無惨に濡れ、雪にたわみ……。

彼は、沈みかける足を苦勞して持ちあげた。降り積んだやわらかい雪は、彼の足をくわえこみ、かんじきを履いていても、底無しの沼を行くようだ。

昨日、懐のあたたかい旅人が、里の男たちを数十人やとい、かんじきや紐ひもりで、ゆくての道を踏み固めさせたというが、たえまなく降りつづく雪にたちまち埋もれ、道の跡もわからない。

西北は平野がひろがり、枝わかれした大小の川が流れる。越えてきた東南は、巻機山まきはたやま、苗場山、

八海山^{はっかいざん}、牛ヶ嶽、駒ヶ嶽、兎ヶ嶽と、前の宿で名を教えられはしたがどれがどれやらわからぬ山が、白い波濤のようにつらなり、なかに浅草山というのがあるときいて、その名は薄刃のように胸を裂いた。

——まだ、みれんがあるのか。江戸に。いや、東京^{とうけい}に。

東京と名があらたまつて十二年めになる。

澤村田之助丈ね。

幟の朱が眼を刺す。

——なぜ、こんなところに幟が……。

佇んでいると、笠に肩に雪が重くなる。幟の朱は雪片のあわいに明滅する。

彼は、幟のかたわらを通りすぎた。

踏む春雪はやわらかいが、その底には、去年の秋の末から降り積んでは凍てついた雪が、堅い根雪となつているときいた。

左手から森が迫り、梢の雪は風に散乱した。彼は右にそれた。森がかえこむ闇のなかに足を踏み入れない自分に、少し驚いていた。

川のふちに出た。極寒のあいだは、この川は氷に閉ざされ、その上に雪が積もつて平地のようになる。そうして、二月の末か三月のはじめ、陽気が少しゆるむと、おのずと裂け、大小幾千の氷塊、氷片が、藍色の水にただよい、川下にはこぼれ、北海に流れ去るのだそうだ。

いま、彼が見る川は、結氷はすでない。岸に近い浅瀬に薄氷^{うすこおり}がはり、その下を澄んだ水が流

れる。

これも前の宿できいた話だが、毎年、春の彼岸の頃ともなると、この川の水、二、三尺上を、幾百万の白い蝶の群れが、翅をすりあわせ銀粉を散らし、川下から川上にむかつて舞いのぼってゆくという。

幾里にもわたり、流れの上を霞の衣をたなびかせたように、夜明けから黄昏まで翔びつづけ、陽が沈むとともに、蝶の群れも、花吹雪のように水に散り落ち——力尽きるのだろうか——川下にはこび去られる。一羽として、次の日の出を見るものはない。川は北の海に注ぎ入る。蝶も……。

徒勞な溯行、虚しい飛翔は何のためなのか。蝶の行動の理由を、土地の者もだれひとり知らなかった。一日かぎりの壮麗な乱舞。ただ死ぬための飛翔。一日かけて川上へ川上へと翔びつづけるのは、死後の葬列の距離をのぼすためであるかのようだ。あるいは、北溟ほくめいにいったん流れ去った氷塊が、青陽せいよう、蝶となってよみがえり、生をたどり返そうとでもいうのか。

華麗で妖しい白蝶の群れを、川面に舞い落ちる雪片の上に重ね、——田之太夫のようだ……と、彼は思う。

吠え叫ぶ声が、耳を打った。

狂人たちか、と目をみはった。素裸で川に入り、氷のような川水を浴びている数人の男がいたのである。

わう、あう、と吠え猛らずにはいられないのだろう。彼のように蓑笠をつけていてさえ、立ち

止まれば胴震いが軀を走りのぼるのだ。

雪が溶けこむ川水を手桶に汲んで肩からかけ、両手を胸の前に組んで烈しく振り、吠える。

雪の中で荒行か。ご苦勞なことだ。

彼が行きすぎようとしたとき、男たちはいっせいに川から土手に駆け上がってきた。肌を濡らした水がたちまち薄氷になってゆくようだ。彼の前を横切り、かたわらにある破れ堂にとびこんだ。それまで彼は堂があることに気づかなかった。

乾いた布や着物がおいてある。足踏みしながら荒々しく髪や肌をぬぐい、粗末な布子をまとう。その上に蓑笠をつけるのはいい方で、蓑をまきつけ手拭いをかぶって雪と寒氣を防ごうというものもある。

——乞食か？

男たちは、かんじきをつけ、堂を出て、背を丸め、彼が今来た方向へ去ろうとする。

「やい、何とか言ったらどうだ」

一人が齒の根のあわぬ声で彼にくっつかかった。唇は青紫になっている。

「伊達や酔狂で水浴みしているんじゃないぜ。不審を持たねえのか。不審に思ったら、どういうわけでごさんしょうと、一言たずねてみる氣にゃあならねえのか。薄情者」

「江戸のお人かえ」

ふるえ声ではあるが伝法な啖呵に、彼はたずねた。

「そうともよ」

「なつかしいの。越後の北の片田舎で、江戸のお人に会おうとは思わなんだ」

「おめえさんも江戸か」

薄情者、と捨てぜりふで立ち去ろうとしていた男は、

「東京と言わねえところが、お互え、嬉しいやな」

気をゆるした顔になった。

「江戸のお人が、どうしてまあ、越後くんだりで水浴みかえ」

彼は男と肩を並べた。道を逆もどりすることになるが、どうせ、ぜひとも行かねばならぬ目的地は、彼には、ない。

「よく訊いておくれだ。おめえさん、ここまでくる途中、みかけなかったかい。澤村」

「田之助の幟！」

彼は、思わず言葉をかぶせた。

「そうよ」

「あの幟が何か……」

「おめえさんも江戸のお人なら、田之太夫の名前ぐらい」

「知らないでか」

男は嬉しそうな笑顔になったが、それと同時に、こちらの表情をさぐるような上目で、

「おめえさん、芝居は……好きかい」

彼は、浮かびかけた苦笑を消した。相手にかつてなことを言わせてみようと思った。

「まあ、嫌いな方じゃあねえが」

「田之太夫の芝居は見たことがあるかい」

「いいや。かけちがつて。だが、田之太夫は……」

言いかけて思いなおし、

「それじゃあ、おまえさんは田之太夫の一座の」

「市川三すじと言いやんす」

色の黒い金壺眼の男であった。

「市川三すじと言やあ、紀伊国屋の舞台には必ず出ていた役者だっけね」

「おや、おまえさん、くわしいな」

「なに、話にきいただけさ。女形ときいたが」

「そうさ」

この、頬骨のはった金壺眼の小男が女になるところを、彼は想像してみた。猿にうどん粉をまぶしたようになることだろう。

「この雪で興行もならず、足止めよ。たまりかねて、川で千垢離せんごりをとっていたのよ。早く雪が止みますようにと、願かけたわさ」

「そういうわけかい。だが、雪で興行ができぬというのは、客が入らないのかえ」

「いや、常打ちの小屋ならば、花の田之太夫がつとめるのだ、雪が降ろうと雨だろうと、客を呼べるにちげえねえのだが、ここはなんと、雪中演場せっちゅうしやばいなのよ。幟を立てたところに、舞台があった

ろうじゃねえか」

「あれが、舞台……」

彼は声をのんだ。たしかに、一段小高くなつてはいたが……。

「おれたちも、この村の勧進興行に買われてきたが、まさか、雪を積み固めた裸舞台とは、来てみるまでは思いも及ばなんだ。お江戸じゃあ、浅草両国の掛け小屋までが、ごたいそうな常打ち小屋に生まれかわって櫓をあげた御時世だというのに、いくら雪深い越路とはいえ、雪舞台とはなあ」

「楽屋も花道もなししかえ」

「いや、あれはまだ作りかけなのだ。舞台も花道も、楽屋、棧敷、いっさい雪をつかねて形にくくり、一夜おけば凍てついて鉄石のようになる。なまじな掛け小屋よりゃあ豪的だとき。しかし、舞台も見物衆の土間も、屋根がねえから、雪が晴れねえことにはな」

「見てみたいもののだの」

「見て行かっせえ。隅田川原によそえて言えば、京大坂にまた一人、あるやなしやの都鳥とうたわれた田之太夫、あいつとめまする狂言だ」

「富士になぞらう立女形、三国一とみめぐりの、堤の花も及びなき、姿の花の八重一重」
と、彼はつづけた。

「よく知っていなさる」

男は疑わしげに、くぼんだ眼窩の奥からすくいあげるように彼を見た。

「なに、評判であつたもの」

「田之太夫、このたびつとめます狂言は、『日高川』^{ひだかがわ}。太夫は清姫を人形ぶりでつとめます。見てやっておくれよ」

話しながら歩くため、二人はおくれがちになる。他の者たちの姿は雪舞いのむこうに遠くつた。

「見せてもらいましうよ」彼は言った。「雪がやむまで、宿に逗留しましう。田之太夫の清姫、似合いだらうねえ」

「そりゃあおまえ、言うがこたゝないわさ」

「太夫が清姫を人形ぶりでつとめなさるのかえ」

そう言ったとき、彼は、思わずせぐりあげそうになった。

紀伊国屋三世澤村田之助の、傍はなれぬ弟子だった市川三すじとは、あたしのとき。

おれの名を騙るこの醜男に、啖呵をきってやろうか。

「田之太夫は、どこに泊まっていなさるのだえ」

おだやかな声で訊いたが、腹のなかでは、——なにが田之太夫なものか、大騙りめ……、毒づいていた。

「雪舞台の脇に小屋があつたらうが」

——あの、納屋のような小屋に……。かりそめにも、澤村田之助を名乗る役者が、あんなみじめなところに。

「富士になぞらう立女形、三世澤村田之助さまに、目の法楽だ、ひきあわせてやっちゃあもらえませんか」

「そうよな」

男は思案する顔になった。

「いえ、まず、舞台を拜ませてもらってからにしましょうか」

彼は、言葉をひっこめた。どんな舞台を見せるつもりか。面の皮アひんむくのは、そのあとでいいや。

「おや、道が行きどまりにでもなっていましたか」

前夜泊まった宿の女中は、濯ぎ桶に湯を汲みこんで、彼の足のかんじきをといた。

「花の太夫がこの片田舎で興行するそうじゃあねえか。いそぐ旅じゃあねえ、一目見てからと、引返してきたものさ」

「紀伊国屋でしょう」

女中は蕩けるような目になった。

「早く雪がやんでくれないかと、わたしも待ちこがれていますのさ」

「ねえさん、この土地の人じゃあないようだね」

「わかりますか」

「一言聞きゃあ、わからあな」

「お客さんも、江戸かね」

「嬉しいね、おまえもかい」

「葛飾の在だから、江戸といばっていいものやら」

四十に近い年にみえた。のど首は白粉焼けし、顔に疱瘡の痕が残っている。

昨夜、彼の夕餉の世話をしたのは、この女ではなかった。飯盛り女郎にまといつかれるのがわずらわしいので平旅籠にしたのだが、ゆうべの女は、床をつけてくれと、うるさくせがんだ。彼は相手にせず、ひとり寝したのだった。

泊まり客は少なく、相部屋にはならずにすんだ。夕餉の膳をはこんできたのは、足を濯いでくれた葛飾出という女であった。

「越後から吉原に身売りする娘は多いが、おまえは、逆に流れてきたのだな」

「そうですね」と、女はかるく受け流した。

「江戸では、田之太夫の芝居を見たのかい」

「いんや、と、女は首を振った。

「市村座だの守田座だのは、平土間だって、わっちらにゃ手が出なんだ。掛け小屋をのぞくのが、せいっぱいでしたのさ」

「それでも田之太夫の名は知っているか」

「ひところ、深川の芸者屋に奉公していましたからねえ」

「土橋か仲町の芸妓だったのかい」

「まさか。この器量じゃね。輕子かろこでした。荷かつぎですよ」

夜、彼はその女を抱いた。男に荒らしつくされたような、肉の衰えた軀であったが、女は心をこめて彼をたのしませようとつとめた。その技巧は彼が衰しくなるほど手なれていた。彼も、かつて、蟲眞の客に色でつとめたこともある。

朝までと女は言ったが、去らせた。

部屋を出る前に、女は小さい手焙りに炭をつぎ足していった。そのくらいの火では何の足しにもならない。掻卷かいまきを肩の上にひきあげた。仰向あおむいている目に、天井のあたりで何かが淡く光る。起き直り、行灯あんどんの火をかきたて、目をこらした。天井の板のすきまから漏った雪水が、糸のような氷柱になって下がっているのだった。屋根の上に高く積もった雪が溶けるまで、漏るところのつくろいもできないのだろう。

あの騙りどもが泊まっている小屋も、氷柱が垂れていることだろう。

猫でもいいから行火あんかがわりに欲しいや。冷たい足先をこすりあわせる。足が冷える、さすれ、と田之助に命じられたことがあった、と彼は思い出す。そのとき田之助はすでに足を切断していたのだった……

鬼灯ほおずきを、根気よく揉んでいると、中に灯がとまったように紅く透きとおって、無数の種が泳ぎはじめる。幼いころから、鬼灯の種をぬきとるのが巧みだった。

袋のなかの丸い実が漆をかけたように熟すのは夏なのに、雪の日にも、渋くて甘酸っぱい朱い汁で指先を濡らしていたような気がする。

しなやかな長い根を地の下に這わせて、鬼灯は、思わぬところに生えてくる。ヤブカラシのように強靱な繁殖力を持っているのだ。

この生命いのちの力に溢れた根が子墮ろしに使われると知ったのは、いくつぐらいのときだっただろう。彼の家に、人目を避けるようにしてたずねてくる女に、母がそれを使ってやっていることもかなり早くから知っていた。

吉原くるわ内に育った彼には、いふことも子墮ろしも、格別なことではなかった。

仲之町の引手茶屋の裏手、踊りの師匠の家の一間に、幼時の彼は母親と間借りしていた。

昏い路地のむこうに光が降り注ぐ仲之町の通りが白く切りとられ、昼下がり、光を一瞬翳らせて、花魁道中が通りすぎる。その華やきも、彼には珍しくもない日常の一齣ひとコマであった。